

## 文明論と文明学科

### 文明論について

現代文明が抱えている極めて深刻な問題に、どこまで既成の学問が対応できているのであろうか。既に久しくいわれてきたことであるが、現在既成の学問体系の枠のままでは解決しえない問題が生じているのである。

例えば、安楽死の問題である。医学はキリスト教の影響もあって、現代まで、命を護り、少しでも命を延ばすことを基本として進歩してきた。それが医者使命でもあり、誇りでもあった。そこで回復の見込みがまったくない患者に対しても、点滴や酸素吸入をおこない、タンがつまり呼吸が苦しくなると、気管切開をして息をさせ、ともかく命があるかぎり、生かしつつける。患者の家族も、一日でも長く生きてほしいという思いで、看病にあたる。

これまで当然とされてきたこうした姿が、現代社会のなかでは当然と言えなくなってしまった。末期のガン患者の場合、はげしい痛みや苦しみに絶えず襲われるが、医者は人工延命術を施す。したがって回復のみこみが全くない患者はただ苦しむだけに生か

しつづけられる事になる。

また人工呼吸装置の力をかりて、脳障害で意識を失ったまま植物人間になって生き続けているケースも多いという。こうした場合、ガン患者の苦痛、家族の精神的金銭的な負担はたいへんなものである。かつて植物人間のケースとして、一九七五年にアメリカでカレンさんの事件がおこった。パーティで酒と精神安定剤を飲んだため、脳障害をおこして昏睡状態になったカレンさんは、そのまま人工呼吸装置で植物人間になって生き続けた。両親はこの娘の姿のあまりにいたまじさに、「優雅さと尊厳のうちに神の手に戻して欲しい」と裁判に訴えた。最高裁は彼女に植物的生活を強制する権利はないと、生命維持装置を外すことを認めた。植物人間になって患者は蘇る望みもなくなただ生きつづけていることは、家族の者にとってもすごい精神的な苦しみになったのである。

田崎 篤朗

また医学の進歩により、長生きになってきたが、そのため脳軟化になる老人が増えていく。とてもみじめな姿だともいえる。お年寄り達は、この先自分がこんな姿になるのでないかという、非常な恐怖心を抱いているという。強度の脳軟化症で寝たきりとな

ってまでも、生きなくてはならないのかという思い。その思いは家族に迷惑をかけたくないという気持ちも手伝って、自殺につながる危険性もある。

現在の医学の延命術はさらにすぐく、回復の見込みが全くない患者を、鼻孔牛乳（鼻からの牛乳）、あるいは静脈への栄養注入だけで、数カ月生かすことができる。口腔底部ガンの場合には、下顎の大半を取り除くことで、生きる事が出来る。しかしこの場合、顔の半分をなくし、しゃべることも出来ず、生きなければならぬ。

このような医学の進歩を前にして、新しい問題として起こってきたのが、人間として敵かに死ぬ権利があるのではないか、ということである。これは、いままでの生きる尊さという觀念だけでは、推し量れない、新しく、しかも切実な問題なのである。

こうした問題をどう解決するのか。これは、医学と倫理・哲学・宗教そして政治・経済の領域にまたがる問題といえよう。つまり、寝たきり老人の場合、安楽死を認めるとしても、純粹に死の尊厳の故に、安楽死を望んでいた場合はともかく、患者が家族への気兼ね、ことに長い入院生活にかかる医療費を考えて安楽死を希望することもあり得るわけで、まず老人医療の制度を充実させることがどうしても必要である。そのうえで死を与えてもよい状態とは何か、つまり人間の尊厳の問題について、きちんと答えを出さなくてはならない。もしここをいいかげんにしておくとして、どうせ回復しないし家族にとつてやつつかいだからということ、

安楽死を認めてしまうことになる。こうした考えや意識は、実に危険な要素を含んでおり、人間を有用な種類と無用で邪魔な種類に分けていき、社会に無用な存在は抹殺してもよいという、とんでもない觀念を生み出す素地となり得るのである。

このように医学の進歩は、生活に深刻な事態をもたらしているのだが、ここで私が言いたい事は、医学上の事が、すぐれて哲学の問題になっているということである。換言すれば、医学と哲学がしっかりと手を結ばないと、きちんとした答えが出せない問題となっているのである。

これは安楽死のことだけではなく、現代に起こっている他の事柄についても、言えることである。核兵器や公害の問題、自然破壊という現代の大きな現象は、むしろ科学の発達が原因となつて生じたものであり、今後の科学の進歩によっては解決されていく面も多分にあるであろう。だがその一方科学者の倫理性、企業の利益追及の姿勢、それに生活上の便利さ快適さを求める我々現代人の氣質が問われているのである。つまりは、地球的な規模での真の豊かさとは何か、という基本的な問題を解決していかなければならないのであり、それにともない私たちの生活も根本的に変えていかなければならない。そのために私達は車を捨てなければならぬかもしれない。このように現代社会がもつ諸問題は、科学の分野を見通しながら、あるいは経済についても視野にいれながら、総合的な見地から倫理的・哲学的に扱わなければならない性質のものである。そもそも現代文明を推進させてきた科学とく

に科学技術そのものが問われているのが、現況である。これまで科学技術は進歩によって不治の病を克服するなど、人類の問題を解決し、人間生活を豊かにし、世の中が進めば、いずれ良くなるという進歩の観念を支えてきた。しかし、科学の進歩が核戦争への危険など人類生存の危機を齎したことで、科学への信奉がくずれ、科学そのものを哲学的つまり総合的に問い直しざるを得なくなってきた。

### 文明学科の存在意義について

文明学科が、学問の総合を目指す学科であると規定するならば、いま述べてきたような現代文明の問題を前にして、文明学科のこれから果たさなければならぬ役割は相当に大きなものといえる。

しかし学問の総合化ということは、極めて困難である。今の文明学科でも、この点あまりうまくいってはいないのではないかと、というのが、私なりの印象である。むしろ逆に細分化の方向にあり、大学院のなかでも総合化を目指す大学院生が少ないと聞いている。これは、先に述べたように、世の中が総合的な研究を求めているなかで、はなはだ残念なことといえる。

そこで、この大学院のOBとしてなんとかならないのだろうかという思いで、シンポジウムでの発言を与えられたこの機会をお借りして、在学中から考えていたことを申し上げ、シンポジウムの発表に替えさせていただきます。

文明学科に近い仕事をしている方で名前を挙げるとすれば、立花隆氏であろう。立花氏は現代文明の根本的な問題をテーマに選び、多くの著述をおこなっているが、『田中角栄研究』ではロッキード裁判での問題点を克明に検証し、『脳死』では、その倫理的問題を扱っている。そこでの立花氏は、自分でも述べているが、ほとんど専門的知識のないところから出発している。

素人であること、これは注目される立場である。専門的であることは、今日では、非常に細分化された学問の一分野、二分野について専門的知識・研究をしているということである。歴史学でいうと、日本史の、奈良時代の、政治についての、その制度についての専門家という具合になる。医学ではもっと細分化されて、ガンでも、その部所部所で専門的になっているそうである。そうになると、その箇所箇所での治療法が研究されていくが、その治療が身体全体にどういう作用を及ぼすかについては、その専門家には見えにくくなっているのである。手術は成功したが、患者は亡くなりました、というアイロニーがいわれるゆえんである。歴史家についても、専門以外の分野、時代、まして歴史全体は見通しがつきにくくなっている。日本史の流れ全体を踏まえたいえの個別研究は、非常に難しいし、現に殆どない状況である。このように細分化したところでの問題意識は、当然限られた専門分野の範囲のことでのことになりがちになる。公家の日記をこまめに調べ、天皇行幸の詳しい日程を解明したとして、どうしてその研究をしたのか。その動機は、学会や研究者の間で、問題になっている

からという場合が多い。では学会でそれが問題になっているのは何故かというところ、これまた先学たちの研究の積み重ねのなから、ここが問題になったから、ここがまだ解明されてないからという具合になる。専門分野が細分化されたところでは、このパターンになっていきやすい。ここでは、自分の研究テーマと現代がどこで結び付いているのか、その接点がよくつかみにくいし、そうした問題意識さえ起こりにくい。むしろ現代的なことは、問うべきでないとの姿勢が研究者の姿であるとされる。

最近天皇制が話題になったおり、名のある歴史家の発言をいくつか目にしたが、専門の時代の天皇については、興味深くさすがにと思ふ論旨を展開されていたが、現代の天皇制のことにおよぶと、素人のわたしでさえ読んでいて、説得力のなさを感じる。もっとも読んでいる側も、その方の専門のところを期待して読むわけであり、書かれた方も、その時代の専門家として論じられている。すぐれた研究者ほど、専門の立場を明確にされて、その立場を逸脱しないようにして、発言なさる。

これは研究者の賢明で真摯な在り方なのだが、現代のように文明の危機感がたかまっている状況では、現代文明に対して総合的にきちんと発言できる研究者が求められている。残念ながら、極めて細分化された今の学問体系の枠からは、今述べたようにそれは無理なところである。

では現代文明の問題を総合的に扱うには、どのような立場があるのか。個々の専門的な知識については、その専門の研究者にと

てもかなうわけがない。総合的に研究しようとするなら、いまのところ立花氏のように素人としての立場しか、その余地はないだろう。素人であることの生命は、既成の学者にはない、現代文明への鋭い問題意識である。現代は何が問題なのか、何を問題にするべきなのか。それを生活の場でしっかりと意識し把握するのである。これだけ混沌し、複雑になった現代社会で、本質的な問題を探り出すだけで大変な仕事である。そして探り出した問題点に基づいて、学問の世界に乗り込んでいき、立花氏のように専門家の教えを請いながら、解決を目指して研究調査を続ける。

幸い東海大は、医学部まである総合大学である。知りたいと思ふ学問知識は、すぐ近くにいくらでもあるという、恵まれた環境にある。文学部をもっと特色のある、さらに意義ある学科にするには、どの学部学科でも単位がとれることが絶対必要である。さらに論文の指導教官についても学部学科を越えて自由に選べるシステムにすべきであろう。医学部へ行った文学部の学生は、医者になるためではなく、文明論を研究するためそこで勉強をする。史学科と文学部は非常に近い立場であるが、史学科へ行った文明の学生は、現代文明の問題を掘り下げるために、そのテーマを前面に掲げて、過去の文明を扱う。この考えには、恐らくこういう反論が予想される。大学院ならともかく基礎の訓練を受けていない学部生にそれが可能なのか。

先程の立花氏の場合、『文明の逆説』を読むと、哲学部の学生

の時にヴィットゲンシュタインを経て文明論へと入って行っている。この立花氏の例を挙げるまでもないと思うが、文明学科には、哲学・文学・歴史学などと同じような意味での文明学、つまり文明学という独自の方法、理論体系というものが出来ているわけではない。今は従来の学問の方法論を使って研究しなければならぬ。哲学の方法を借りて文明論の研究をすすめる、あるいは歴史学の方法で、社会学の方法でというように。既成の学問の方法、体系、内容をよりどころにする以上、その既成の学問とくに方法論を身につけなければならぬのだが、残念ながらも文明科の学部生の場合、他の学科の学部生に比べ、その訓練が多少足りないように思われる。私は史学科出身だが、文明科の学生で歴史を研究している人達は、史学科に比較して例えば古文書の読み方の訓練があまり受けてはいない。ということ、史料がきちんとあつかえないことになり、歴史研究のうえで致命的なことになりかねない。これはカリキュラムの問題がかかわってくることであり、先生方に演習をもっと充実させて頂くよう、お願いしたい。学科内で無理なら、もっと史学科での演習が受けられるよう単位の問題を考えて頂きたい。

文明科の学部生が、他の学科の学部生と差がないほど、方法論を身につける事ができたなら、文明科としての独自の研究が可能になると思われる。現在でも、文明科の学生は史学科では学べないことを講義演習で学んでいるわけで、学問の視野が広がっている。しかも同じ学科の中に文学を研究する人、歴史を研究する

人、哲学を研究する人と方法論を異にする人々がいるということは、様々な情報や刺激を受けて、その視野はもっと広がるのであろうし、深くなるであろう。このことは現に私がこの大学院に在籍していた時に経験したことである。その当時文学、歴史、英文、演劇、数学の学科出身者、(これらの院生は他大学から東海大に入学してきたのだが)、それにこの文明科出身の人を加えて、大学や学科を異にした人々の集団であった。学科が違うと、学問のアプローチの仕方は当然、問題意識、発想の仕方、感覚、それに不思議にも顔付きまでちがう。研究発表のときなど、一つのテーマをめぐる討論になると、それら異分子がぶつかるのだから、かみあわないこともあるにしても、実に様々な情報が得られるし、その新鮮な刺激のなかで、新しい問題意識が芽生えてきた。その問題意識を論文までに結び付けるには、相当な努力が必要であるが、ここには力のある学部生や大学院生がたくさん在籍しているわけだから、他の学科ではないような、斬新なテーマで、斬新な内容の卒論、修士論文が生み出される可能性は充分である。

このことをもう少し整理して言うと、学問を異にし、様々な発想がぶつかり合う事により、細分化された今日の学問体系の枠を乗り越えた、何かが見えてくる。そこに新しい問題意識が生み出され、それが斬新な論文へと発展するのである。文明学科は、そういう場であると思うのである。その意味で文明学科にとって問題意識ということが、特に重要な事になるであろう。つねに現代

社会に向けて、新しい問題提起をし続けるのが、文明学科だといえよう。

このためには学科や大学院を、制度上少し整備する必要がある。私は、共同研究のシステムを取り入れることを提案したい。卒論でも、修士論文でも、共同研究を認めていく。そこでもし安楽死のテーマを哲学、歴史、医学の知識を持った学生達・院生達が共同で研究し、ひとつの論文にまとめ上げたとしたら、おそらくこれまでにない新しい成果が期待できるのではないか。

いうまでもないことだが、共同研究を成り立たせるためには、かなりの学力がなければならない。今の学生達の学力でそれが可能かという議論も、当然あるであろう。しかし、魅力ある研究環境が、学生の研究意欲を引き出すことも事実である。是非、先生方にこの点について、御考慮して頂きたい。